



総裁秋篠宮妃殿下

ご動静

第69回結核予防全国大会より

と き 平成30年2月13日、14日

ところ リーガロイヤルホテル広島（広島県広島市）

秋篠宮妃殿下は、13日に研鑽集会のご聴講等をなされ、14日の大会式典にご臨席になりました。式典ではおことばを述べられ、秩父宮妃記念結核予防功労賞受賞者に表彰状を授与されました。



第六十九回結核予防全国大会 秋篠宮妃殿下おことば

平成三十年二月十四日（広島県）

本日、「第六十九回結核予防全国大会」が、ここ広島県において開催され、全国からお集まりの皆さまにお会いできましたことを、大変うれしく思います。

はじめに、第二十一回「秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに、心よりお祝い申し上げます。長年にわたり、結核の予防や対策に取り組んでこられましたご努力に対し、深く敬意を表します。

日本の結核罹患率は、年々低下していますが、二〇一六年の統計では、十万人対十三・九であり、一年間に約一万七千人が新たに結核を発症しました。新たな結核患者の約三割が八十歳代であるなど、結核患者に占める高齢者の割合が高まり、その多くは、糖尿病などの生活習慣病、認知症やその他の疾病の治療も、必要としています。また、二〇一六年の外国生まれの結核患者数は約千二百人で、三年連続して増加しました。その出身地は四十か国以上に及び、患者と医療従事者とのコミュニケーションに課題が生じることもあると伺っています。受診や診断の遅れによる集団感染もありました。

昨日の研鑽集会では、結核医療の地域連携についての基調講演に続き、結核診療の現状、高齢の結核患者に対する退院支援、外国生まれの結核患者への支援、産業医と結核との関わり、婦人会の活動などについて、貴重なお話を伺いました。今後、全国各地で結核対策を進める方々が協力し、日本を二〇二〇年までに結核の低まん延国にする、という目標の達成に向けて、早期発見と支援の輪を広げていく大切な機会になったのではないかと思います。

世界に目を向けますと、二〇一六年には、およそ千四十万人が新たに結核を発症し、約百七十万人が命を落としています。結核罹患率が高い国々に対して、患者の発見や治療のための人材育成、保健医療システムの構築など、日本の経験を活かした協力が求められております。

結核予防会は、国の内外で、重要な役割を果たしています。本大会に参加されている皆さまが、日頃より結核予防活動をはじめとする肺の健康のための活動に力を尽くされていることに、感謝いたします。

これからも、皆さまがご自身の健康に留意されながら、人々の健康を支えるために、ご活躍くださいますようお願い、式典に寄せる言葉といたします。

第69回結核予防全国大会を顧みて

平成30年2月13日、14日の両日にわたり、結核予防会総裁秋篠宮妃殿下のご臨席を仰ぎ、第69回結核予防全国大会がリーガロイヤルホテル広島で開催されました。

「せとうち広島から、結核のない世界をめざして」をスローガンに、2日間で約1,500名の方々にご参加いただき、広島県や本部等のご指導、ご協力をいただきながら、無事に終了することができました。関係の皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、大会の概要について以下のとおり報告いたします。

－第1日－

■全国支部長会議

公益財団法人結核予防会理事長工藤翔二氏、公益財団法人広島県地域保健医療推進機構会長松浦雄一郎、厚生労働省健康局結核感染症課課長三宅邦明氏の挨拶の後、公益財団法人広島県地域保健医療推進機構常務理事沖田清治の議事進行の下、以下の3題の講演と情報提供があり、協議が行われました。

「近年の結核の動向と、結核低まん延化に向けた今後の対策の方向性」

厚生労働省健康局結核感染症課課長 三宅邦明氏

「世界の結核の現状と課題」

公益財団法人結核予防会理事・国際部部长 岡田耕輔氏

「データヘルス計画の沿革と展望」

公益財団法人結核予防会専務理事 竹下隆夫氏

■支部長午餐会

恒例の支部長午餐会は、総裁秋篠宮妃殿下のご臨席のもとに和やかに行われました。

■研鑽集会和アトラクション

研鑽集会は「結核の低まん延化を踏まえて、すすめよう、広げよう早期発見と支援の輪」をテーマに、基調講演とシンポジウムが行われました。

まず、基調講演では、独立行政法人国立病院機構東広島医療センター元感染症診療部部長重藤えり子氏から、「『結核療養所』から地域医療連携へー結核低まん延化の中でー」と題して、新規登録患者に占める高齢者・外国出生者の割合が増えている今、専門病院と各地域医療機関や行政との連携が重要であることのメッセージをいただきました。

次にシンポジウムでは、座長を広島県感染症・疾病管理センターセンター長の桑原正雄氏及び結核予防会



公益財団法人広島県地域保健医療推進機構
会長 松浦 雄一郎

結核研究所副所長慶長直人氏が務め、次の5名の演者から発表がありました。

独立行政法人国立病院機構東広島医療センター呼吸器内科医長宮崎こずえ氏から「広島県における結核診療の現状」と題して、医療機関における結核早期発見への取り組み、結核診療の状況について報告がありました。

国家公務員共済組合連合会吉島病院医療ソーシャルワーカー柿上裕二氏からは、「高齢結核患者に対する退院支援」と題して、結核病棟における退院支援の取り組み、独居、高齢世帯、認知症患者への退院支援の状況について報告がありました。

広島県西部東保健所保健課課長坂本慰子氏からは、「広島県における外国出生結核患者への取組について」と題し、広島県内の外国出生結核患者の状況や広島県及び西部東保健所における外国出生結核患者等への取り組みについて報告がありました。

社会医療法人社団沼南会会長檜谷義美氏からは、「産業医と結核の関わり」と題し、産業医としての外国出生労働者に対する結核予防への取り組みについて報告がありました。

一般社団法人香川県婦人団体連絡協議会会長野田法子氏からは、「第18回中国・四国地区結核予防婦人団体幹部研修会報告」と題し、中四国結核予防婦人団体幹部研修会での結核予防、地域における健康づくり活動の推進の取り組みについて報告がありました。

続いて、総合討論に移り、座長の司会進行の下、基調講演者も加わり、演者6名による活発な討論が行われました。厚生労働省健康局結核感染症課課長の三宅邦明氏から特別発言として、「薬剤耐性菌への対策としてのDOTSの重要性と、地域医療連携が重要であること、結核予防会、婦人会で低まん延国化実現への更なる取り組みを期待する」との助言をいただき、桑原正雄氏が全体のまとめを行い終了となりました。



研鑽集会討論会

研鑽集会に引き続き、アトラクションとして広島ジュニアマリンバアンサンブルによるマリンバの演奏が行われました。東日本大震災チャリティーソングである「花は咲く」や、宮島のしゃもじを使った「津軽じょんから節」パフォーマンスなどを元気いっぱいの子どもたちが披露し、会場の参加者から盛大な拍手を受けました。



広島ジュニアマリンバアンサンブルによるアトラクション

■大会歓迎レセプション

総裁秋篠宮妃殿下のご臨席を賜り、県内外から約300名のご参加の下、広島県知事の開催挨拶で開催し和やかな雰囲気での交流を深めることができました。



歓迎レセプション

—第2日—

■大会式典

式典は、広島県知事湯崎英彦氏及び結核予防会理事長工藤翔二氏の挨拶で始まり、総裁秋篠宮妃殿下のお言葉を賜りました。

続いて、秩父宮妃記念結核予防功労賞第21回受賞

者表彰が行われ、総裁から保健看護功労賞3名、事業功労賞（団体、個人）7名に表彰状が授与されました。その後の議事では、広島県健康福祉局長菊間秀樹氏が議長に、広島県地域保健医療推進機構常務理事沖田清治が副議長に選任された後、まず、全国支部長会議及び研鑽集会の概要報告を結核予防会理事長工藤翔二氏が行いました。続いて前日開催された「大会決議・宣言起草委員会」で取りまとめられた大会決議文案を広島県地域保健医療推進機構会長松浦雄一郎が、大会宣言文案を広島県地域女性団体連絡協議会会長佐藤浩子氏がそれぞれ読み上げ、いずれも満場の拍手で採択されました。最後に、次期開催地を東京都とすることが提案され、了承されました。



大会式典

■特別講演

「広島酒造りの歴史と国産ウイスキーの誕生」と題して、享保18年創業の竹鶴酒造株式会社相談役である竹鶴壽夫氏の講演が行われました。広島酒造り発展の歴史を踏まえ、国産ウイスキーの父、連続テレビ小説「マッサン」のモデルでもある竹鶴政孝氏のエピソードを中心に楽しくお話しいただきました。



竹鶴壽夫氏による特別講演

■終わりに

本大会を成功裏に終えることができましたのは、広島県、結核予防会本部、厚生労働省、広島市をはじめ、多くの関係者の皆様のご支援、ご協力の賜物であります。ここに改めて深く感謝申し上げます。🍷

厚生労働大臣祝辞

公益財団法人結核予防会総裁秋篠宮妃殿下の御臨席を賜り、第69回結核予防全国大会が開催されることを、心からお慶び申し上げます。

はじめに、本日、秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞された皆様に心からお祝い申し上げますとともに、皆様これまでの御尽力と御功績に対し、深く敬意を表します。また、本大会を主催されている結核予防会の、我が国の結核対策への長きにわたる貢献に対し、改めて深く敬意を表します。

さて、我が国の結核患者数は順調に減少してきていますが、世界保健機関（WHO）の定義する、人口10万人対罹患率10以下の低まん延国には至っていません。

特に近年、我が国では、結核がかつて国民病であった時代に罹患した方が、潜伏期間を経て、高齢化による免疫力の低下に伴い発症するケースが多くみられます。このため、高齢の結核患者の早期発見に力を入れてまいります。また、国際化の進展により、結核新規登録患者数に占める外国出生者の割合が増加していることから、入国前スクリーニングの実施を検討しています。

結核の治療においては、直接服薬指導、いわゆるDOTS（ドッツ）を確実に実施することが重要です。地域、職場、学校等の関係者の皆様との連携を強化し、患者の生活環境にあわせた実施の徹底に努めてまいります。

2020年までに低まん延国になるという目標を達成するためには、これまで以上に対策を加速させる必要があります。今後も、格別の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、大会の開催に御尽力いただきました広島県や結核予防会をはじめとする関係者の皆様に、心から御礼申し上げますとともに、お集まりの皆様の御健勝と益々の御活躍を祈念して、私からの祝辞といたします。

平成30年2月14日

厚生労働大臣 加藤勝信

（代読 厚生労働事務次官 蒲原基道）

広島県知事挨拶

本日ここに、結核予防会総裁である秋篠宮妃殿下の御臨席を仰ぎ、第69回結核予防全国大会を開催できますことを誠に光栄に存じます。

御来賓の皆様、そして全国各地から御参加いただいた皆様を、県民を代表して心から歓迎申し上げます。

また、本日、栄えある秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞される皆様には、心からお祝い申し上げます。

結核は、かつてわが国では「国民病」と言われ、不治の病として恐れられていましたが、医学の進歩や、生活環境の改善などにより、現在では適切な治療を行うことで完治できる病気となりました。

これまでの着実な取組により、平成26年に国内における新規登録患者数が初めて2万人を下回り、平成28年には約1万7千人まで減少しているところではありますが、世界的に見ると、未だ結核の「中まん延国」であります。

また、患者の高齢化に伴う合併症患者の増加や、国際化の進展による外国出生患者の増加、薬剤耐性結核への対応など、結核対策を取り巻く状況は複雑化しており、引き続き結核対策の取組が必要です。

本県では、平成28年度に広島県結核予防推進プランを改定し、保健所を中心として、県内の医療機関や高齢者施設等の関係機関と緊密に連携し、患者の状況に応じた確実な服薬やまん延防止に向けた取組みを推進しております。

本大会を契機に、結核は「過去の病気」ではなく、「現代の病気」でもあることを多くの方々に認識していただき、結核の制圧に向けた運動を、ここ広島県から全国へと広めていくことができれば幸いです。

結びに、本大会の開催に当たり、公益財団法人結核予防会をはじめ、多くの関係の皆様方に御支援、御協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げますとともに、本日御出席の皆様の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。挨拶とさせていただきます。

平成30年2月14日

広島県知事 湯崎英彦

第69回結核予防全国大会決議

2015年に改正された「結核に関する特定感染症予防指針」において、日本の結核罹患率を2020年までに人口10万対10以下の低まん延状態にすることが目標に掲げられました。

2016年の「結核の統計」によると、新登録患者数は17,625人、罹患率は人口10万対13.9、また10の道県が低まん延状態になりました。患者の高齢化が進んでおり、75歳以上が半数を占めています。高齢結核患者は合併症を持つことが多く、発見が遅れて、重症化や周囲への感染拡大の原因になる場合があります。外国出生患者は全患者の7.6%、特に20歳代では60%近くを占めています。発見の遅れが原因となり、学校や職場等における集団感染事例も発生しています。このような中で目標を達成するためには、ハイリスクグループに対する早期発見や潜在性結核感染症治療の徹底、日本版DOTSに基づく様々な機関や職種の連携による患者中心の支援の強化、さらに合併症対応や必要病床数の減少に合わせた医療提供体制の再整備を進める必要があります。

一方、世界保健機関（WHO）の推計では、2016年に世界で1,040万人が新たに結核に罹患し、その10%がHIV合併結核、多剤耐性結核は49万人、結核による死亡者は約170万人と、単一の病原体による感染症としては死亡の第1位でした。WHOが進めている結核終息戦略では、2035年までに世界の結核罹患率を人口10万対10以下にして、結核による破滅的な経済負担を強いられる世帯を皆無にするという意欲的な目標が設定されています。この目標の達成のために、患者中心の予防と医療、すべての人々が必要な医療を受けられるようにするユニバーサル・ヘルス・カバレッジ、骨太の政策と支援システム、研究と技術革新の強化を柱とした対策が必要とされています。この促進のために、世界的な取り組みが始められており、2018年秋には国連総会に合わせて国家元首級による結核に関するハイレベル会合が開催される予定で、日本の役割も期待されています。日本は、高まん延期より官民一体で推進した対策の実績や、日本が開発した新技術の活用により世界の結核終息戦略に貢献できると考えられます。さらに、こうした経験を広く「肺の健康」や生活習慣病予防に役立てることも重要です。

以上のことから、本大会は、国、地方公共団体、医療機関、結核予防会、全国結核予防婦人団体連絡協議会等の関係団体が力を合わせて、次の6項目について努力することを決議します。

- 一、日本における2020年までの低まん延化の実現を達成するため、効率的かつ効果的な結核対策を進めること。
- 一、地域の実情に合わせた患者中心の医療や支援を推進するために、医療提供体制の整備や連携の強化を図ること。
- 一、世界の結核終息戦略の推進に協力し、日本の経験や新しい技術を活かすこと。
- 一、全国結核予防婦人団体連絡協議会等、関係団体と連携して、国際協力の貴重な財源ともなる複十字シール運動を盛り上げる等により、結核に関する正しい知識の普及・啓発を行うこと。
- 一、「肺の健康」を守るため、肺がん、COPDや喫煙対策等に関する普及・啓発を推進すること。
- 一、生活習慣病予防における指針のもと、特定健診・特定保健指導について円滑な実施の支援を行うこと。

平成30年2月14日

第69回結核予防全国大会

第69回結核予防全国大会宣言

2020年までの結核低まん延化を目標に、高齢者・ハイリスクグループへの対策を強化し、患者中心の服薬支援や治療を推進します。また地域の実情に合った結核医療体制の整備をさらに進め、正しい知識の一層の普及・啓発に努めます。各地域ではより効果的な結核対策の実施とともに、「肺の健康」と生活習慣病予防の推進に取り組みます。

さらに、世界保健機関が進める結核終息戦略に協力し、日本が高まん延期を克服した経験と日本で開発された新技術を活かしながら、世界の低まん延化に向けて一層の支援に取り組みます。

以上、宣言します。

平成30年2月14日

第69回結核予防全国大会

研鑽集会報告 「結核の低まん延化を踏まえて、すすめよう、広げよう早期発見と支援の輪@広島」

結核予防会結核研究所

副所長 慶長 直人

第69回結核予防全国大会が平成30年2月13日、14日、結核予防会総裁ご臨席の下、広島県広島市にて開催されました。ご関係の皆様の日頃の努力が報われつつあり、広島県の平成28年の結核罹患率は人口10万当たり11.4と、低まん延状態まであと一步のところまで来ています(日本全体では、人口10万対13.9の状態)。

官民一体となった結核への取り組みや戦後復興による生活水準の向上に伴い、日本の結核罹患率は着実に低下してきました。当時、多くの若い働き手を失う深刻な社会問題であった結核が、ここへ来て、高齢者、超高齢者の抱える今日的問題となり、多くの医療関係者を悩ましています。一方、徐々に増加してきた外国出生者の結核は薬剤耐性率が高く、新たな対応が求められています。

本研鑽集会では、このような今日的な結核の問題に直面して、広島県における医療関係者、婦人会の方々が、日々どのようなご努力をされているのか、それぞれ現場でしか分からないリアルな切り口から取り上げていただきました。各演者の皆様から、分かりやすく、はっきりとした、強く熱いメッセージをいただいたことに心より御礼申し上げます。

基調講演では『**「結核療養所」から地域医療連携へ - 結核低まん延化の中で -**』と題して、これまで広島県の結核医療を支えてこられた重藤えり子先生(独立行政法人国立病院機構東広島医療センター元感染症診療部部長)から、結核医療がどのように変わっていったのか、今後の地域医療連携強化の必要性を伺うことができました。

基調講演に続くシンポジウムは、広島県感染症・疾病管理センターの桑原正雄センター長と筆者で進行させていただきました。

宮崎こずえ先生(独立行政法人国立病院機構東広島医療センター呼吸器内科医長)からは、「**広島県における結核診療の現状**」として、呼吸器症状が乏しく、診断が難しい高齢者の肺結核の特徴について、また合併症や生活上の問題により入院期間が長引くことなど、高齢者医療特有の問題点を一つ一つ、ご解説いただき

ました。

柿上裕二氏(国家公務員共済組合連合会吉島病院、地域医療連携室医療ソーシャルワーカー)からは、「**高齢結核患者に対する退院支援**」として、特に入院早期に開始する支援、患者・家族との面接、病棟カンファレンスによる情報交換、きめ細やかな個別の対応についてお話しいただきました。

坂本慰子氏(広島県西部東保健所保健課課長)からは、広島県結核予防推進プラン(平成28年度改定)に謳われている高齢者結核と外国出生者結核対策のうち、増加する「**広島県における外国出生結核患者への取組について**」として、外国人技能実習生への講習会など、具体的な事例についてご発表いただきました。

檜谷義美先生(社会医療法人社団沼南会会長)には、「**産業医と結核の関わり**」というタイトルで、中国・東南アジア出身者が数百人働いている造船会社の産業医の立場から、極めて多岐にわたる産業医活動に従事してきた経験と、結核への新たな思いをお聞かせいただきました。

野田法子(一般社団法人香川県婦人団体連絡協議会会長)氏からは、「**第18回中国・四国地区結核予防団体幹部研修会報告**」として、中四国における結核婦人団体の取り組みの中で、特に病気の予防、早期発見、早期治療に関わる精力的な啓発活動について、拝聴いたしました。

最後に、厚生労働省健康局結核感染症課の三宅邦明課長から、広い視野での、薬剤耐性対策から始まる国の施策に関する心強いコメントとご助言をいただきました。

本研鑽集会は、地域における結核医療を認識し直し、今後求められる、効率的かつ患者中心の医療を考える上で、とても大切なものと認識されます。今年の記録的な豪雪、寒波にもめげることなく、ますます婦人会活動の充実が期待される、熱気のあふれる一日でした。🍷

支部長会議報告

支部長会議では講演2題と情報提供1題があった。ここでは誌面の都合上、うち1題についてその要旨を掲載する。議長は広島県支部沖田清治常務理事。会議出席者は105人。

◆近年の結核の動向と、結核低まん延化に向けた今後の対策の方向性（講演要旨）

厚生労働省健康局結核感染症課 三宅邦明課長

日本は罹患率は減少しているが低まん延国には至っていない。2020年までに欧米先進国並みに罹患率10万対10以下にしたい。現在の問題は、高齢者と外国出生者。発症者は60歳以上72%、80歳以上は40%を占める。死亡者は60歳以上が97%。80歳以上が77%。外国出生患者は、平成28年には新登録は1,300を超えた。全結核患者に占める割合は約8%。100人のうち8人は外国生まれとなっている。ロシアや北朝鮮では多剤耐性が多いという。我が国では60人程度で済んでいる。薬剤耐性は医療システムの評価指標になり、DOTSで薬を最後まで飲みきるという体制ができていないとそうなる。拡大を防ぐには感染源を断つことが大切。見つけたら発病させない、きちんと治療することが大切。予防指針は平成28年に改正したが、三つのポイントがある。一つは患者中心のDOTSの推進。保健所がその拠点として積極的に関係すること。潜在性結核感染症(LTBI)へのDOTSを徹底すること。二つ目は病原体サーベランス、分子疫学的手法でより徹底的に調べていく。三つ目は低まん延国家に向けた体制作り。高齢者の定期健診での発見率の低下をどうするか。医療体制、結核病棟の維持困難な中で、病床単位できめ細やかな配置にしていくことが大事だ。

医療施設や薬局、訪問看護ステーションなどと連携しながらDOTSを続け、保健所が進行管理の拠点となって、ばらばらにならないようにしていく。各都道府県におけるLTBIへのDOTSでは、やれているところとやれていないところがある。地域連携のDOTSでは、保健所は自分たちだけで何とかやってしまうおとするが、むしろ調整者となって周りとの連携することのほうが求められている。これは地域DOTSの重要性を示している。

低まん延国になると結核病棟が維持できない。各自自治体で利用率の差があり維持が厳しい。民間の経営意識と行政のマネージングの調和をどう取っていくかが問われる。高度な合併症や認知症・精神的な障害のあ

る患者に対して、結核が入院できる、結核単体の治療ではなく複合的な治療ができる体制を再構築するモデル事業を進めている。

外国生まれの患者は、20～29歳の若者が多く、入国6年以降の発症が多い。外務省と話しているが、長期滞在の外国人は、結核でない、結核が治癒したなどを証明して初めて入国できるようにすることを厳格に求めていきたい。入管法では結核患者は入国できないことになっている。外国人を差別ではなく区別としてハイリスクな方々だということで見えてほしい。

健康診断、高齢者は、発見率65歳以上の住民で0.003%しかない。なかなか見つからない健康診断では、皆さんとしても力が入りにくいかも知れないが、周囲や孫・子どものために健康診断を受けるよう運動を進めたい。都道府県別塗抹陽性肺結核は早期発見の指標である。感染させる状態になる前を見つけることが重要で塗抹陽性になる前での発見が重要。これが低いところが25%ぐらい、そうではない自治体と2倍差がある。健診のターゲットをしっかりと考えながらやってほしい。

医者が結核を疑わなくなっている。患者の10人に2人は、発病してから2カ月以上経っている。確定までに初診から1カ月以上かかるのが24%、4人に1人は医者に行ってもそれだけ時間がかかっている。診断を早くするのが塗抹陽性患者を減らすことになる。結核の集団感染は50～100件発生している。患者が17,625人、我が国の最大の感染症であることには変わりない。高齢者が大半を占め80歳以上の罹患率は60を超えている。若年層を中心に外国出生者の割合が増えている。LTBIを含めた全てのDOTS実施率を95%にする。高齢者・ハイリスク群における早期発見に向けた対策を進める。☺ (普及広報課)